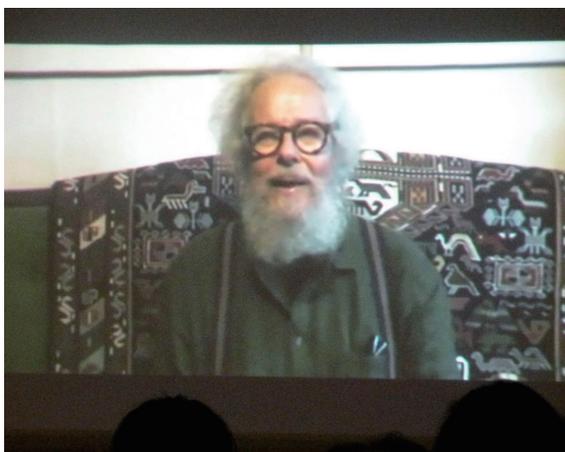


国際交流フィンランド2017

—森と湖の北方から詩と文学の深い調べ—

日時 2017年10月14日(土) 講演会14時～17時 懇親会17時30分～19時30分

場所 日本出版クラブ会館・きくの間



カイ・ニエミネン氏



末延弘子氏

秋の午後、フィンランドの文学と音楽が、ほぼ満席114名の心に響いた。独立一〇〇周年。強国に挟まれて苦難の末に独自文化を育み、叙事詩『カレワラ』を原点にもつ。

急病手術で来日できなくなった詩人・翻訳家のカイ・ニエミネン氏が、手術直前のフィンランドから渾身の特別動画講演「フィンランド文学における日本文学の影響」を送ってくださった。スクリーンにはこちらを親しく見つめて日本語で語るカイさんのアップ。背後に虫の音も聴こえ、自然豊かな彼の地から、独立前にまでさかのぼる日本文化受容の足跡が今日に至るまで語られた。国際情勢をめぐる複雑な関係性の中で強調されたのは、戦争とは別の次元で滔々と日本文学が愛読されてきたことだ。右派だったり左派だったりその時々輸入母体は変わっても、日本のさまざまな文学が書物や新聞やラジオで親しまれてきたという話に驚かされる。日本の詩歌、松尾芭蕉、与謝野晶子、小泉八雲、菊池寛、徳永直、大岡昇平、谷崎潤一郎、川端康成、太宰治、開高健。日本の短歌から学んで独自に発展させたフィンランド語短歌が盛んだという話も新鮮だった。大江健三郎や『源氏物語』などをフィンランド語に翻訳しただけでなく、現代詩人として多数の受賞歴をもつカイ・ニエミネン氏の詩世界と人となり、紹介者の本多寿氏が語られた。本多さんによって朗読されたカイさんの詩は、自然の中に生きる深い心と内省的な文明批評が光った。

続いてフィンランド文学研究者・翻訳家の末延弘子氏の講演「カレワラから現代作品まで貫くフィンランド文学・文化の本質」。叙事詩『カレワラ』の豊かな世界が紹介された。語り継がれた神話を採集し、独自の編集作業でひとつの壮大な詩物語にまとめたエリアス・リョンロットの功績と独立運動との関わり、登場人物（神）の魅力、自然の優位性と森羅万象との対話における日本文化との共通性、詩が国の文化の土台となっていることなど。トーベ・ヤンソン『ムーミン』の話に続いた。その登場人物は約六〇にもものぼるそうで、全員が主人公というところにフィンランド文化の思想的な特長を力説された。意見の相違

を大事にして「私」を尊重しながら話し合う風土があるとのこと。現代作家レーナ・クルーンの作品世界も紹介され、資料では現代詩人オッリ・ヘッコネンの詩もあった。シベリウスの『樹の組曲』から「樅の木」のCDがかけられ、会場は北緯60度の森の中にワープした。わかりやすく深い講演は大変好評で『詩界』265号（来年四月刊行）に全文掲載予定である。

はぎた雅子氏によるフィンランド伝統楽器カンテレの演奏。フィンランド衣裳と珍しい楽器に参加者の目も釘づけだ。不思議な深い音色で八曲の繊細な調べに癒やされる。特にフィンランド民謡のしんみりと哀切な名演奏には会場が静まりかえった。音楽も詩の心、そんなはぎたさんの優しい演奏だったが、会場を爆笑させる愉快なトークも光った。

後援のフィンランド大使ユッカ・シウコサーリ氏からは懇親会でフィンランド語のご挨拶（通訳・末延弘子氏）。独立一〇〇年の若い国だが『カレワラ』以来の詩と文学を根底にすえたあり方は、国民多数の図書館利用に象徴される読書を愛する風土につながっている。文学や芸術を通じた心のつながりで、戦争などに満ちた現代世界を乗り越える力をもつだろうというお言葉に勇気づけられた。後援の日本現代詩人会国際交流担当理事・鈴木豊志夫氏からも講演会でご挨拶をいただいた。

会長の川中子義勝氏は講演会と懇親会の挨拶で、出演者への共感的な感想やフィンランドに学ぶ詩や文学愛好の心などを語った。講演会の開会挨拶は顧問の細野豊氏、閉会挨拶は理事長の長尾雅樹氏。司会は、講演会が谷口ちかえ氏と佐相憲一、懇親会が下川敬明氏と石下典子氏であった。会外からの参加者が多いのも今回の特長だった。

参加者からは盛会を喜ぶ声が多々寄せられて、中身濃い詩情に満ちたつどいとなった。

（担当理事・佐相憲一）



はぎた雅子氏



谷口ちかえ氏 佐相憲一氏



ユッカ・シウコサーリ氏



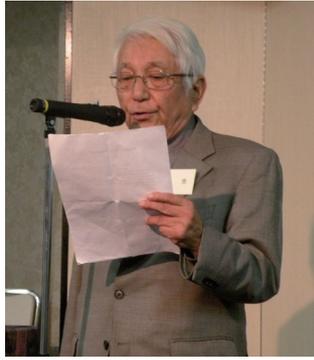
本多寿氏



川中子義勝氏



鈴木豊志夫氏



細野豊氏



長尾雅樹氏



石下典子氏と下川敬明氏



太田雅孝氏



清水茂氏



講演会会場風景



懇親会会場風景